

(5) ヴィーンとインスブルック

1908年2月26日――ヒンターフーバーの薬局《白天使》で、正規の見習い期間を終える半年前――トラークルは見習い試験に立派な成績で合格した。この実習終了試験を前もって済ます許可が、見習いに対し、帝室並びに王室週政府から1907年12月16日与えられていた。証明書は9月20日付けになっている。だから見習い期間を実際に終えた後、交付されたようだ。それには親方の署名がある。白天使薬剤師、カルロス・ヒンターフーバー。

この年、これまでの詩に比べ新しいより鋭い輪郭を示す詩が生まれた。不毛な年1907年に実り多い年が続いた。トラークルはドン・ジュアン場面に精魂を傾けた。またこの年には、遅くとも1909年には、かつてデーメルに発見されていたオーストリア軽騎兵少尉カール・クランマーのランボー翻訳を知ったようだ。クランマーはガリシアの孤独な行軍中に翻訳していたのである。そして――軍隊での彼の地位を顧慮し――K・L・アンマーの筆名でライプチヒのインゼル書店から出版していた(1907年)。特にランボーの生涯に関するシュテファン・ツヴァイクの序文がトラークルの心を捕らえたように見える。ここには、トラークルが宿命の兄弟として感じ取れる、一詩人のポートレートが描かれていた。たとえただ束の間の流星のように文学的天空に輝き、そして又かき消えていたにしても。《光輝、流星の輝き、その現存以外どんな理由もなく火を灯され、孤独に生まれそして消えゆく》と、マラルメは驚嘆の叫びをあげていた。(この言葉はトラークルのことを言っているのではないだろうか?) ボードレルは若い詩人に麻薬と語彙を贈っていたが、ランボーは成熟するトラークルに生の軽蔑と反乱を贈った。ランボー・アンマーの言葉や形象も耳と心に残った。剽窃と境を接する同化、言語の親子関係、変形に至るまで。[ジーベンビュルゲン・ザクセン人作家アドルフ・メッシェンデルファーが、この事実注意到を向けさせた最初の人物だった。それも雑誌《クリングゾール》の1925年3月号、クローンシュタット(第2巻、3号)において。当時メッシェンデルファーはアンマーの翻訳から30カ所以上に渡って――しばしば文字どおり――採用されているのを証明できた。その後、他の者たち、例えばラインホルト・グリム、H・リンデンベルガー、ベルンハルト・ベッシェンシュタインなどが、このテーマを徹底的に取り扱っている。] 直接それに続く期間は、いずれにしろ、この神秘的サンスキュロットのフランス人の狼煙に完全に包まれており、ついにこれは――トラークルが同じ時期、高山アルプスのチロル風景に目を向けたことで――美しく星座として輝く古代的・ドイツ的夜、ヘルダーリンに沈潜することとなったのである。

当時1908年には、『ドン・ジュアンの死』あるいは最も早期の数多くの散文作品のように、今日もはやほとんど残っていない詩も成立したであろう。1909年友人エアハルト・ブッシュベックに引き渡された青春詩作品は、作者によって既に篩い分けられていたが、その選集は本来もっと大きなものだったろう。トラークルは青春詩の返却を決して要求しなかったばかりでなく、好きなように扱ってくれとブッシュベックに述べたことさえあった。こういう事情から、ブッシュベックは後になって、それを後世に残す権利を引き出したのである。いずれにしろこの青春抒情詩も《印刷するものと決まっていたし、ある出版者の興味を呼び起こすことになった》――ブッシュベックは事実1909年12月、それをミュンヘンのアルベルト・ランゲン書店に差し出した。ランゲン書店は現代のオーストリアの作家たちを特に引き受けており、そこでは例えば1909年から1914年の間にカール・クラウスの5つの作品が出版された。芸術批評的判断を下すなら、ブッシュベックは、その後ようやく1939年に出来上がった『黄金の聖杯から』の刊行で、死者の友人に尽くすことにはならなかったが、しかし現存在分析的見地からは、これら早期の自己証言は測り難いほどの価値を有する。

《ミネルバ》の若者たちは詩作を止めるか、あるいは有益な職業に沈み込んでいるかだった。実際これら子供じみた田舎ボヘミアンの内、誰一人として何らかのものを残した者はいない。詩人としても功績を残すことになったかもしれないただ一人の友が、エア

ハルト・ブッシュベックだった。彼はトラークルの成長期、常に信頼できる人間として愛すべき役割を演じた。友人を作ったり役に立つ関係を結んだりする能力、文芸企業を実際よく熟知していること、こういったことが彼をトラークルの有益な同伴者、また必要不可欠な助言者にしたのである。二歳年少のブッシュベックはやっと1909年に、だからトラークルに一年遅れてヴィーン大学に入学したが（彼は法律を学んだ）、すでにザルツブルクの時から影響力の大きいジャーナリストや文学者たちと、そこでヘルマン・バルと、なかでもとりわけ首都で書いている同世代の仲間たちと結びつきを得ていた。ヴィーンの芸術家や作家とのトラークルの出会いは、大抵活動的なブッシュベックによって仲介された。彼は《文学と音楽のための大学連合》でも、間もなく議決権を得た（1911年からその議長を務めさえした）。芸術的大学生のこの戦闘的団体は、展覧会、朗読会そして大抵は騒々しい音楽会を催したのである。ブルックナーやマーラーと並んでシェーンベルクやヴェーベルンといった若者も討議に付された。ロース、ココシュカ、シーレそれにクラウスがこの団体に親しかった。自らを《叫び、若者たちへのパンフレット》と名乗り、ロベルト・ミュラー、エミール・アルフォンス・ラインハルトそれにエアハルト・ブッシュベックの編集による、ほんの時折出版されるこの小冊子で、アヴァンギャルドは発言の機会を得たのである。トラークルは後に会員になった。

友人の詩を雑誌に提供したり一結果は上手く行かなかったが、例えば『メルジーネ』を《ヴェスターマンス・モナーツヘフテン》に一トラークルの名前で編集部あるいは原稿審査係と文通し、予約者を集め、根気よく出版の試みをしたのも他ならぬブッシュベックだった。天才的友人を文学界で有名にしようとする、20歳のブッシュベックの性急すぎる支援法の可愛らしい一例が、1909年6月7日の手紙である（ブッシュベックはグムンデンの私立校生徒として高校卒業試験を済ましており、トラークルはヴィーン大学で二学期目の薬学の勉強にはいつていた）。《君がキュルシュナーの文学カレンダーに掲載されるような手段を講じ給え。編集者というのは、自分の所に届くどんな名前でも、それが既にキュルシュナーに掲載されているかどうかを、いつもまず最初に調べてみるものだ。その名前が載っていれば、何とまあ容易に原稿を採用することだろう。（編集者はそのとき胸中で思うものだ。この名前はちゃんと掲載されているではないか。だとすればもう何もする必要はないと。）これは君なら（君の戯曲は既に上演されたことを、もし君が述べれば）それこそ簡単に成功するだろう・・・ちょっと某博士に書きたまえ（無垢な詩人たちの処女陵辱者に）、一通の怒りの手紙を、〈キュルシュナーの文学カレンダー〉に君の名が見えないと。君についてはっきりと・・・した後で。だって君は実際一度は、何か君の宣伝をしなきゃならないんだ。》ゲオルク・トラークルと宣伝！詩人は快活な言葉をかなり費やし、この有能な男のたゆみない努力に感謝している。そこでトラークルは〈大権力者〉とのある手紙で、ブッシュベックに話しかけ、こう大声をあげている。〈おおブッシュベックなる男と商売！〉別の時にはこうも書いている。〈・・・同じように今後ともよろしく、将来いつの日かぼくの詩を出版しようとしている君に。〉

1908年1月1日でトラークルは兵役義務年齢に達していた。裕福な商人の息子にふさわしい学歴を持つ彼にとって、当然ながら普通三年の現役勤務を、一年志願兵として務めあげることだけが考慮された。なるほどこれに要求される高等学校卒業証書をトラークルは提出できなかったものの、特に見習い試験に合格している理由から、4月28日の通知によると、一年現役勤務をすぐに済ましてもよいという特典が認められていた。しかし実際に兵役に就いたのは、ようやく1910年10月1日からで、だから同年6月と7月に厳しい口述試験に合格し、薬学マギスターの学位を新たに手にいれた後のことだった。

1908年9月末、トラークルはヴィーンへ移り大学の薬学部に着席を置いた。帝国の首都並びに王宮所在地では、4学期と更に軍薬剤師としての一年が彼を待ち受けていたが、この街は最初の瞬間から彼を寄せ付けなかった。トラークルはフィッカーに宛てた1913年11月の手紙のなかでも、なお急転直下ヴィーンを語っているように、この〈不潔な街〉を心底憎んでいることを、決して隠さなかった。ヴィーンでは最初の頃しばしば一人ぼっちだった。シュヴァープやカルマールとだけは、時々会うことがあった。

そこでトラークルの学友の母親であるフォン・カルマール夫人はこう報告している。詩人は自分と息子に、1908年（あるいは1909年）ちょうど出来上がったばかりの詩『夜の歌』を朗読してくれたし、彼女のスケッチをしてくれたと。

トラークルはヴィーンでは無名だった。そして《家具備え付きの間借り人》として、凍てつくように寒い又借りの住居が、生まれつき暗い気分をなおさら陰鬱にするのかもしれないなかった。いつものように日付のない手紙、恐らく1910年7月中旬ブッシュベックに宛てて書かれたものであろう。何故なら〈私はそのほかにもう二つの試験を受けました〉という文章が見えるからである――これは多分6月28日と7月9日の口述試験のことを言ったのだらう――。この手紙はよそよそしい大都会の完全な索漠さを見せており、彼は折々にこの索漠さを逃れて、ほんの数日間家へ帰るのかもしれないなかった。〈私はヴィーンで完全に一人ぼっちです。それに耐えてもいます！そして先日、一通の小さな手紙を受け取りました。すると大きな不安と例えようのない諦めの気持ち！――すっかり自分を包み隠し、どこか他の人目につかない場所へ行けたらと思います。それなのにいつも言葉に留まっています。あるいはもっとよく言えば、恐ろしい無気力に！君にまだこんな風に書き続けてもいいのでしょうか？なんたる無意味！・・・何もかもがすっかり変わり果ててしまいました。見続けてばかりいます――すると取るに足りぬものが果てしなくなるのです。そして豊かになればなるほど、ますます貧しくなってしまう。〉

トラークルは要するに、都会生活を軽蔑していた。共同体それ自体を軽んじていた訳ではないが――〈人間たちの美しい街〉と『夢と狂気』の中で一度は語りかけられている。幼時と青年時代の街ザルツブルクさえ、彼は憎しみ（と自己憎悪）を荒々しく爆発させ、この上ない激しきで罵っている。〈私は更にどれほどこの呪われた街に留まらねばならないのだろうか？〉と、彼は1909年ブッシュベックに宛てて書く。そして1912年には（レックに宛てて）、博物館的・幽霊じみた街ザルツブルクはトラークルにとり〈死に絶えた街〉なのである。同様にインスブルックも――そこでフィッカーやそのサークルと知り合う前には――彼の心の中では嫌な街だった。〈私は決して思いもしなかったでしょう〉と、彼は1912年4月ブッシュベックに書く。〈このそれ自体が既に重い時間を、重荷に悩む呪われたこの世界の、最も残忍で野卑な街で過ごさねばならぬなどとは。そしてみもしらぬ意志がひょっとしてここで私を10年間悩ますかもしれないと思うと、暗澹たる希望喪失に落ち込み、発作的に涙を流さずにおれません。――何のための苦悶。私は詰まるところ、やはり常に哀れなカスパール・ハウザーなのでしょ。〉

オペレッタのテノール歌手の足元にひれ伏し、表面的なものに熱狂していたヴィーン、あらゆる芸術的関心の点で、この大反動的あるいは――これはひょっとするとなおさら悪かったかもしれないが――大保守的、精神敵対的街は、トラークルにとり痛ましい滅びと来るべき没落の単なる象徴、黄金色に輝く象徴にすぎなかった。無心な眼差しにとっては魅力あふれる帝都に、彼は決してただ一つの詩行さえも捧げなかった。文学好きの社交界は、田舎者の彼には閉じられていた。そこでは彼の礼儀作法は、半ば粗野な者のそれとして、驚きと物笑いの種になったかもしれないが。ホフマンスタール、リルケあるいはツヴァイクのように、魅惑的皮肉屋にして懷疑家という、この模範的階層に順応できるだけの十分な弾力性がなければ、芸術家としてはアルテンブルクがしたように、演技場で道化師を演じるか、あるいは又《炬火・クラウド》（商業界の特殊用語）のように、かれらと血を流すまで戦わねばならぬかだった。ヴィーンは何れにしろ〈冷たく邪悪に腐敗した一族が住まっている〉街だった。

ヴィーンに来てからようやく数日経った1908年10月5日、トラークルはザルツブルクで結婚していた姉ミンナ（ミア）・フォン・ラウターベルクに、得るところ多大な一通の手紙を書いている。この手紙の文章は、大きな意味を持つ記録だ。何故なら、これはトラークルがどれほど深く衝動置換に悩まざるを得なかったか、又どれほど痛々しくはっきりとこの自己抑圧、いな自己破壊を意識していたかを示しているからである。

〈・・・この数日間、自分に起きたことを観察するのは、とても興味のあることでした。それと言うのも、自分のいろんな素質を考えてみると、それは普通ではないし、かといって又それほど異常でもないように思えたからです。ここに着いたとき、私には初めて人生をあるがまま、はっきり見ているように思えました。いろんな個人的解釈をいれず、赤裸々に、無条件に。又現実が語るいろんな声を聞いたようにも思えました。身の毛のよだつ、痛々しく聞こえるあの声を。そして人間に通常のしかかっている重圧の何たるかを、また運命の不可抗力的力を、一瞬感じたのです。〉

〈ありとあらゆる動物的衝動を（これが時間の中で生命を押し転がしていくのです）いつも感じながら生きるのは、恐ろしいことに違いないと思います。私は自分の中にこの上もないその恐ろしい可能性を感じ、嗅ぎ取り、手に触れました。そして血の中で魔神が咆哮するのが聞こえます。肉体を狂わす針を持つ、多くの悪魔たちが。何と恐ろしい悪霊！〉

〈過ぎ去った！現実というこの幻想は、今日、再び無の中へ沈み込んでしまった。物たちは私には遠い、更に遠いそれらの声。そして私は生気を吹き込まれた耳となって、心の中のメロディにまたしても聞き入る。そして活気に満ちた目は、どんな現実よりも美しい形象を再び夢見る！私は自分と一体化する、私は私の世界なのだ！私の完璧な美的世界、無限の和音に満ちた世界。〉

狂気の肉体と、想像上の空想化された、言葉の世界！この手紙は近代ドイツ文学が示し得る芸術家気質の最も美しい告白の一つだが、しかし同時に、次のような証拠ともなっている。つまり神経病的体質と外傷性の体験によって――近親相姦の罪と、発見されれば極度の危険をもたらすあの衝動に対する恐れ――生じた青年期神経症の枠内で、漸次一つの状態像がくっきりと形をなし始めるという証拠である。この状態像は精神異常の初期段階ではないにしても、（内因性の）精神異常に類似している。このことについては――シュペリイが繰り返し注意しているように――死後（ポスト・モルテム）確信を持って診断を下すことはできない。また既にこの手紙に恐ろしいほどはつきりと示されているのは、受け入れることのできぬ衝動欲求の置換が、トラークルにはいよいよ難しくなっており、これが現実に対する嫌悪として現れていることである。だから詩人に一瞬間〈あらゆる個人的解釈をいれず〉、ということは主観的に歪曲させることなく、〈赤裸々に、無条件に〉差し出されていた現実を処理することは、ここでもはや不可能だった。現実を魔神化せず、それに勇敢に立ち向かい同化することをやめて、彼は現実を遠ざけ、魔法によって歪めてしまう。そうしながらも神については一言も述べない。宗教的人間（ホモ・レリギオス）たる彼を悲惨の中でやはり助けて欲しかったし、あるいは助けるに違いなかった神については。人が望もうと望むまいと、闘いと精神的緊張の中で処理しなければならぬ〈人間に通常のしかかっている〉現実の重圧、これに対して、トラークルはもはやずっと以前から太刀打ちできなかった。無抵抗に〈運命の不可抗力的力〉に対する不安におのれを委ねる。彼にとってはゴルゴであるモイラに。いわれのない世界不安がトラークルを捕らえた――それは、彼の性質の〈最も恐ろしい可能性〉に対する不安と同一視される。彼の幻覚の中で血族の運命が種族の運命へと広がるように、今や私的な不安も被造物一般の集合的不安へと広がる。ただ彼には薬剤は神ではなく、睡眠薬を意味する。創造の快感が過ぎ去るとき、仮・死、仮・無への逃亡を達成させる睡眠薬を。

この鍵となる手紙には、1909年と1910年が非常に重要な年となるあの飛躍的發展への出発点も見える。このヴィーンの二年間に、トラークルはおのれにふさわしい全く独自の形式へ至る詩人として姿を現す。この形式を携えて、成熟した最も早期の作品と認められる詩から、青春詩との分離が進む。境界線は漠としており、まだ決してはっきりした区分構造はないが。屑と燃えかす、青春詩の用済みとなった陳腐な作品、友がその作品をどうしようとも、トラークルはそれを友の手に残す。今やいっそう光輝きながら、炎が燃え立つ。炎は高く高く燃え上がり、ついにその工房のこうこうと輝く水蒸気の中から、決定的作品の純粹の形が現れ出るのである。

1909年3月と7月に予備試験に立派な成績で合格する。そして他にも多くの喜ばしいことが報告されている。ミンニッヒは今やヴィーンに住んでいたし、ここで秋には法律の勉強を始める予定のブッシュベックが、小数の詩を審査と推挙のためにヘルマン・バールに送っていた。〈彼の判断は何れにしても、私には大きな価値があるように思われます。その判断がいかなる結果になろうとも。そこから私が期待するのは、彼の明晰で自己確信的態度が、絶えず動揺しあらゆることに絶望する私の性質を、僅かでも安定させ浄化させるということです。これ以上のことを期待できるでしょうか！だってこれは、かつて私が熱望した最も肝要なことなのですから。〉ヴィーンの半月刊誌で、程度の高い音楽と芝居のための雑誌《デア・メルカー》にも、ブッシュベックによっていくつかの詩が届けられた。この雑誌はそこから1910年7月号第2号に、後の草稿『ヘルブルンの三つの池』を掲載する。そしてグレーテは秋に、ピアノのまじめな勉強をポール・ドゥ・コンヌのもとでしようとしていた！だがしかし、肝心かなめのこと——これまで決してなかったような創造の陶醉が彼を捕らえていた。熱病にかかったように詩また詩が書き下ろされ、範例的な物はますます減少する（ランボーを除けば）。純粹の、まさしく独自の形象が生まれ始める。そしてこの言葉は贖罪だったし、浄化だった！ブッシュベックの奇妙なキュルシュナー・着想に対して、折り返し感謝も述べている1909年6月11日の手紙からは、静かな歓呼の声が響いている。〈君には容易には想像できないでしょう。もし数年に渡って押し寄せたものが、また苦痛に満ちて救済を要求していたものが、何もかもこんなに突如として思いもよらず、解放され、自由になり、明るみに出ようとして殺到するときには、どんな歓喜の思いに奪い去られるかということが。私は恵まれた日々を過ごしました——おお前途になおいっそう豊かな日々が持てたら。そして終わりがなければ。私が受け取ったすべてを捧げ、再生するために——そして再びそれを受け取る。それができる身近かな人は、誰でもそれを引き受けているように。——だってそれがやはり一つの人生でしょうから！〉

そのほかの出来事。グレートルがついにヴィーンに下宿し、ゲオルクにとっては10月4日、2年目の（そして最後の）大学の年が始まる。ブッシュベックが大学に入学の手続きをする。彼の到着後、すぐさま文学的活動が孤独なトラークルの敷居で高まりを見せる。青春詩は完結し、篩い分けられた選集としてブッシュベックに手渡され、この友は予約者を集め始める。それというのも出版の取り決めがついたからである。ドーナウ君主国で最大の購読者を持つ饒舌新聞《新ヴィーン・ジャーナル》が（その所有者レーベンシュタイン家と編集長ジャック・リポヴィッツにヘルマン・バールはよく顔がきいた）、10月17日号で——編集部の評を付して——3つの詩、正確に言えば『ある通り過ぎる女に』『完成』それに『祈祷』を掲載する。首都の日刊紙でのデビュー、これはバールと直接にはブッシュベックに負っている。数日後二人の友は、郊外のオーバー・ザンクト・ファイトにあるユーゲント様式の別荘でバールに謁見する。著名な批評家で舞台作家は、若者たちをクリムト・仮面——満面の髭と画家の上っ張り——で出迎え陽気に歓談するが、主としてバールとブッシュベックが話を交わすのである。

残念ながら無名のザルツブルクの抒情詩人に対するバールの関心は、藁火であることがわかった。トラークルの詩は、バールが全体的にも個々それぞれにも紹介していたバロック（ヴィーンでは後にバーロックとさえ言われる）を思い起こさせたことから、とりわけ当初は情熱の炎を燃やしたにもかかわらず、その後トラークルを完全に忘れ去ったのである。バールはもはや指一本動かそうとしなかった。グレーテはこの偽善者的で、また盲信的な男の態度を、ゲオルクの死後も許さなかった。そこでザルツブルクから心の友エアハルト・ブッシュベックに宛て、一度こう書いている（バールは1918年ブルク劇場監督になったとき、ブッシュベックを演劇秘書として宮廷舞台へ同行させた）。〈あなたの友人バールについては、恐らく別の方面から報告を受けるでしょう。腹立たしいことですが、ここでは彼はすべての教会を困らせているのです。八時半にはもう教区教会の周りを拝み倒してまわります。水タバコを手にいれようとして・・・〉

1909年12月18日、ブッシュベックは青春詩作品の全原稿をランゲン出版所へ送った。彼は大喜びしながら、ちょうどザルツブルクに滞在していた友人に報告する。《今日百人目の予約者が決まりました。》ある出版者とのこの最初の試みは、前述した

ように上手く行かなかった。

見受けるところ、ブッシュベックの記憶は必ずしも最良とは言えなかった。それというのも後になって、あの時代まるでトラークルのヴィーンでの唯一の交際仲間が、ミンニヒ、シュヴァープそれに彼だけだったかのように述べているからである。《文学者あるいは何らかの団体の人間とは決して交際しなかった。》ひょっとするとそれは、トラークルのヴィーン生活のごく最初の時期には当てはまるだろう。今日では報告や手紙から知れるように、ブッシュベックは内気で無口な友に、漸次ほぼ同年代の多くの詩人やジャーナリストを紹介した。その中にはエミール・アルフォンス・ラインハルト、パウル・シュテファン（グリューン）、アルベルト・エーレンシュタイン、アルツウール・エルンスト・ルートラ、ルートヴィヒ・ウルマン、ロベルト・ミヒェルそれにハンス・ブレチュカ（のち聖職者の《帝国便り》文芸欄編集長、そしてハンス・シュティフテッガーの筆名で物語作家として名を成した）がいる。ルードルフ・カスナー、ブルーノ・ブレームその他の者も、束の間ながら詩人と出会っている。彼らの内誰一人として、トラークルの人生に影響を残す役割を演じた者がいないのは事実だ。ずっと後のヴィーンの友人たち、ロース、ココシュカ、クラウス、あるいは又フィッカー、K・B・ハインリヒ、レックなどと比較してみれば。トラークルが自発的には《団体の人間》と決して交際せず、ブッシュベックが——しばしば起きたことだが——ヴィーンに居ないときには、すぐさま信用できる青春時代の友であり飲み仲間、シュヴァープやミンニヒのもとへ引き返したこともまた事実である。

トラークルがその芸術について率直な意見を述べているあの珍しい自己証言の一つでさえ、そのような文学的交際と関係する奇妙な事情に負っている。1910年春、詩人は同い年のヴィーンの作家ルートヴィヒ・ウルマンとその許嫁イレネと——彼女とウルマンの間には友愛が芽生え、後に結婚した——知り合っていた。[ウルマンは（1887年生まれ）トラークルと知り合ったとき、フリーのジャーナリストだった。1918年オットー・シュナイダーと共にパンフレット《始まり》を出し、後に脚本家、編集長、演劇批評家としてヴィーンで活躍した。形容詞の異常発達の文体ゆえに、《1. u.》（ルートヴィヒ・ウルマン）はカール・クラウスの嘲弄癖を絶えずそそる標的だった。1938年亡命し、ニューヨーク劇場の世界史部門で働いた。1945年以後、オーストリアやドイツの雑誌に文化報告を書き、1959年ニューヨークで死去した。]そして恐らく雑誌で使ってもらおうと、詩を手渡していた。ブッシュベックの遺稿の中に発見された日付のない手紙で（おおよその日付は——1910年7月中旬——エディト・グレーベンシュッツの徹底した仕事から推定される）、トラークルは友人にある事件を報告している。〈それは私の心を大層痛ませました。〉

〈昨日、ウルマン氏は私に一篇の詩を読んで聞かせました。以前はもっと長いもので、私のに類似していると言っていていいくらいでした、等々。すると見たまえ、現れ出たのは私の詩の一つ、《嵐の夕べ》と類似以上のものでした。個々の形象や言い回しが殆ど文字どおり採用されているばかりでなく（溝の中で舞う埃、暴れまわる馬たちの群れのような雲、風が窓ガラスにぶつかって鳴る、等々、等々）、個々の節の脚韻と脚韻価も、私のと完全に同じですが、4節行の中で4つの個々の形象部分を、唯一の印象に至るべく繋ぎ合わせている私の形象的方法とは、完全に異なっていて、一言で言えば、その衣装はきわめて細部に至るまで、私の仕事の汗水垂らして闘いといった手法を模倣していました。この《類似の》詩には、まさしくこの形式を創造せずにおれなかった生きた熱が欠けているし、全く魂のない拵え物と思われそうですが、それでもやはり、全体として見知らぬ未聞のものに対して無関心でいることはできません。恐らくすぐ続いて、どこかに私自身の顔の歪んだ像が、見知らぬ人の顔の前の仮面として浮かび上がってくるのを見るからでしょう！すでにこの無味乾燥な世界へ足を踏み入れる前から、ある勤勉な男によって、ジャーナリスチックに食べ物にされるという考えは、本当に私を嘔吐させます。虚偽と下劣に満ちたこのどぶ水は、私をむかつかせます。そしてあらゆる疑わしい輩の前では、門と家を閉じることより他には、何も残されていないのです。その他の点については、黙していきたいと思います。〉（トラークルの怒りはまもなく収まった。シュテフ

アン・ツヴァイクへのウルマンの斡旋に対し、トラークルはブッシュベックを通じてお礼を述べ、後にはたびたび彼によろしくとの挨拶を言付ける。1913年2月、トラークルは〈私を大変喜ばせた〉批評に感謝し、同じ時期、手漉き紙の『ヘーリアン』のゲラ刷りをウルマンに送ろうとする等々。この記録から明らかになるのは、トラークルが――これほど意識的な形では恐らく初めて――批判的観察者としておのれに向かい合っていることである。当時彼は《早い成熟期の初めに、彼の詩的方法を意識化する一時期を体験した》(スツクレナール)。そのわずか後の同じくブッシュベックに宛てた手紙で、トラークルは〈形象的手法〉と〈汗水垂らして闘い取った手法〉、また〈生きた熱〉の知覚について、彼独特の試作の方法を更に告白し、こう補足している。〈・・・しかし私は目下余りにも多くのものに(何とも地獄のような律動と形象の混沌)襲われています。他のことに時間が割けないくらいですし、これらのごく僅かな部分にも形を与えることができません。そして結局の所、征服できぬものの前で滑稽な無器用者たるおのれを見ることになり、些細な外部の刺激が、この自分を痙攣と精神錯乱の中へ落とし入れるのです。――それから言うに言われぬ荒涼たる時間が訪れ、長く続きます！何とも無意味な、ズタズタに引き裂かれた生活を送っていることでしょう！――私はカール・クラウスに手紙を書きました。全く非人間的に、冷たく――恐らく彼からは何も期待すべきではないでしょう・・・〉

最初に引用した手紙から更に明らかになるのは、すっかり成熟した作品の内、最も早期の詩の若干は(まさしく『嵐の夕べ』はそれらに属する)、すでに1910年夏には存在していただろうということである。レックはこの詩を〈詩作品集〉の六番目の位置に採用した(クルト・ヴォルフ、ライプチヒ1919年)。これは『滅び』『ミラベル公園の調べ』『女の祝福』『美しい街』『ひとけない部屋で』それに『聖歌』と共に、トラークル・作品への序奏を成している。

嵐の夕べ

おお 赤い夕暮れの時！
開いた窓にちらつき
青の中へもつれでた葡萄葉に
気味悪い幻が巣くっている。

溝の悪臭の中で埃が舞う。
風が窓ガラスにぶつかって鳴る。
暴れる馬の群れのような
険しい雲を稲妻が追い立てて行く。

音たてて碎ける池の鏡。
鋭く窓際でかもめが啼く。
火の騎士はいっさんに丘を下って
森の中に飛び散って燃え上がる。

病院で患者が金切り声で叫ぶ。
ほの青く夜の翼が羽ばたきを始め
突如 泡立ちきらめき
雨が家々の屋根にほとばしる。

『嵐の夕べ』は、トラークルの成熟期と後期作品にとって非常に特徴的な、不合理に並置され、あるいは意識化で互いに関連付けられた諸形象という、あの夢・技巧をいわばまだ子供靴の形で示している。個々では、彼の詩作はまだ全般的に巧みに扱われた現実であり、勿論この印象は最後まで残るのである。しかし現実性からの疎外が増大し、心的には広場恐怖と発作的な非人間化状態によって特色づけられ、強制的に社会化された抒情的私は、外界と汝、結びつきと自分を伝達する欲求からますます離れる。つまり

何か無機的なものを持つ、純粹に自閉的な一つの表現世界が成立するのである。思想の逃亡から形象の逃亡が、まだかなり理解可能な伝達から忘我的、錯乱的吃りが（戯曲断片！）、ますます強まりながら頻出する切れ切れの幻想の連続から、簡潔で力強い非連続が生じる。残るところはもはや伝達不能なもの、絶対的沈黙であろう。トラークルは（多分1911年）改作した次のような『嘆きの歌』をブッシュベックに送った。

緑の花をひらひらさせて
月光の庭園で遊んでいる女友だち——
おお！櫟（いちい）の生け垣の背後では何がきらめいているのか！
黄金の口が私の唇に触れる
すると私の唇は星々のように鳴り響く
キドロンの小川の上で。
だが星雲は平野に沈む
荒々しい言うに言えない踊りは。
おお！私の女友だち おまえの唇
ざくろの実の唇は
私の水晶のような貝殻の口もとで熟する。
重々しく私らの上に憩う
平野の黄金の沈黙。
天空へ立ち昇る血
ヘロデスに
殺された幼子らの。

このときトラークルはこう附言した。〈改作した詩を同封します。これはもとのよりずっといいものです。今や非個性的になって、動きや幻覚がはち切れるほど詰まっています。——この宇宙的な形式と方法は、最初の草稿の限定された個人的なものより、多くのことを君に語るし意味するだろうと確信しています。君にはおわかりでしょうが、描写すべきものに無条件に自分を従属させるのは、必ずしも容易でないし、決して容易にならないでしょう。だから真実にあるものを真実に与えるため、繰り返し繰り返し、私は自分を正さねばならないでしょう。〉

トラークルがここで《真実》や《宇宙的》と呼んでいるものは、カプセルにはいった内面的なものとして、外界からはもはや制御できぬ独立的な、直接的物の熟視として考えられている。この絶対的真実の傍らでは、絶対的美も後方に退くに違いない。そこでトラークルはその詩の絶対的美を、實際意識していたのかどうかという疑問が生じる。これはほぼ否定されるであろう。美はある程度までは、あらゆる悩みを忘れさせることができる——諧音は快感を産む。しかし最も美しい詩作品を書き、彫琢していた時こそ、トラークルは最もひどく病んでいた。レックは一度ある会話から、詩人の次のような文章をメモしたことがある。〈・・・完全な美に対しては、身を守るのがいいのです。その前では内気に眺めること以外、何も残されていないのです・・・〉

抒情的現実が自己疎外の程度に応じて、物的現実からますます歪められるとき、つまり実在に近い隠喩が実在に遠い、現実をねじ曲げる隠喩にとって代わられるとき、当然ながら特別はつきりと、数多くの異稿が現れる。そこで1913年1月の詩『精神錯乱』で、もとの形象〈屋根から流れ落ちる 黒い糞尿〉が〈黒い雪・・・〉に変更され、具体的な場所を示す〈屋根裏へ〉が、《より宇宙的》で、より気分をはらんだ〈ひとけのない部屋へ〉になる。黒い雪は存在しないし、何か白から黒への神秘的変化は、ポーの小説《アーサー・ゴードン・パイクの記念すべき体験》の南極群島を思わせよう。そこでは、白という色があらゆる物の終わりを意味するが故に、締め出されている。こういうことにもかかわらず、詩全体を知れば、この非現実的形象は直ちに納得がいく。この詩では例えば、一本の指が何か堅いもの、固定したもの、骨のようなものに浸されるが、それはまるで流動媒質のようだ。そして人間の頭は砕け散り、それでもなお《思念している》。《恐らく太古の魔術の最後の余韻が、詩人の血の中を駆け巡ったのでであろう》と

テオドール・ザッパが言うのは、この関連では正しい。

黒い雪が屋根から流れ落ちる
一本の赤い指がおまへの額に浸される
ひとけのない部屋へ青い万年雪が沈む
愛する者たちの死に絶えた鏡が。
重苦しい断片となって頭が砕け散り それでも思念している
青い万年雪の鏡の中で影たちを
一人の死んだ娼婦の冷たい微笑を。
撫子の香りの中で夕べの風が泣く。

1912年6月27日の日記に、レックはトラークルの言葉を書き留めている。それによると、人は互いに伝え合うことはできぬ、詩によっても。〈人は決して互いに伝え合うことはできない。〉疑いなく真剣に述べられたこの所感は、長い精神的発展への墓碑銘と見なせようが、注目すべきことに、抒情的開花の主要な時期のものだった。この年の7月の終わり、『ヘーリアン』の仕事が始まる。言うことのできるものと黙すべきものの境界を、トラークルはその終末まで踏み越えることはなかった。

1910年2月初めには、2日間で血の滴る人形劇『グローバル』が創作される。これは内容的にも形式的にも、より原始的な発達段階への粗野な後退、つまり遊走性の退行を思わせる。首がむき出しのトラークルを示す卵型の写真も、ひょっとするとあの時期のものかもしれない。エルヴィン・マールホルトは《一犯罪者の顔》を見せていると言ったし、H・G・ファンケンベルクは、恐らくトラークルが薬剤の影響化にあったとき、撮られたものだろうと述べている。何れにしても、それは《気味の悪いもので・・・野蛮な全体的印象が、むき出しの首と肩の隆起でいっそう強められる》(シュペリ)。この痴情的殺人者・写真には、まるでトラークルが死人じみた仮面のポーズを、何かわざと作っているような所があるように思える。誰がそれを撮ったのだろうか？グレートルだろうか？

ザルツブルクの父の死は(1910年6月18日、運命の日)、目撃者たちの報告のように、ゲオルクと身内の者に深い衝撃を呼び起こした。彼らばかりでなく街の半ばが、この実直な、陽気な男で、商人の死を悲しんだ。手にはいるトラークルの書簡には、この事件の反響が見えぬのは奇異の感を伴うが、詩人が試験の最終期の真只中に居た事情のせいだったのかもしれない。ヴィーン大学哲学部の薬学者・試験記録210号によれば、トラークルのマギスター試験は6月28日、7月9日それに7月21日と記されている。証書(ディプローム)は、ゲオルク・トラークル氏が《物理学、植物学、化学と種属学と分析学と薬学、つまり薬物学》研究によって、《薬学マギスター》の学位を得たことを証している。しかし結局は詩作の仕事にも多忙を極めたようだ。だからくよくよ思い煩う時間もなかった。それというのも、あの〈地獄のような律動と形象の混沌〉が彼を襲った時期だったのである。

そのほかにも、どんな結果になるのか判らぬ出来事が重なる。グレーテはベルリンへ引っ越し、当分は彼の保護から遠ざかった。7月の終わり、トラークルはザルツブルクに戻り、8月と9月いっぱい家に留まる。そして10月1日には、一年・志願兵としてヴィーンで現役軍務に服する。

あの時代については不十分なことが知られているにすぎない。トラークルが軍隊現役勤務の一部をインスブルックで、残り部分を一年半ヴィーンで果たしたという老ブッシュベックの報告が(これは後の伝記作者たち、例えばフェリックス・ブルナーによっても採用された)正しくないのは、今日では確かなことだ。国境守備隊証明書の記入がそれに反しているばかりではない。インスブルックからのトラークルの最初の手紙も(1912年春)、ずっと以前の滞在によってこの街を知っているような印象は与えない。国境守備隊証明書は、《一年志願兵、階級薬学伍長、ゲオルク・トラーク

ル》が、1910年10月1日から1911年9月30日まで、ヴィーンの帝室並びに王室衛生大第二大隊で兵役を務めたことを簡明に述べている。一年現役軍務の特典は、守備隊法（W. G.）28章によって、私費でトラークルに認められていた。

自由志願兵期間の終了後、トラークルは管轄の州狙撃兵補充地域インスブルックとの予備役関係に置かれた。国有財産的ドイツ語という密生した灌木の林が生まれた理由は、ことによると、予備役関係への移動が（その際インスブルックの名前がでるが）、現役勤務の一部を済ますため、インスブルックで行われたせいだったかもしれない。

父の死とグレートルの予期せぬベルリンへの移住後、ゲオルクの飲酒癖は悪化したように見える。薬物消費については言わずもがなである。〈シュヴァープがヴィーンに2週間いました〉と、1911年5月20日ブッシュベックに報告している。〈私たちはこれまでなかったくらい滅茶苦茶に飲み明かしました。二人とも全く気違いじみていたと思います。〉別の時ザルツブルクから、〈しかし私にはちゃんとわかっています。又してもワインを飲むであろうことが！アーメン！〉インスブルックから、〈ワイン、三度ワイン、帝室並びに王室の官吏が、褐色の、赤褐色の牧羊神みたいに幾夜となく荒れ狂うくらいのワイン。〉そして再びインスブルックから（1912年10月）、〈一昨日（いいですか！10です）、4分の10リットルの赤葡萄種を飲みました。午前4時にはバルコニーで月光と霜を浴び、朝にはとうとう素晴らしい詩を一篇書き上げました。その詩は寒さでがたがた震えています。〉《すでに午後には》と、シュペリイは書いている。《インスブルックの葡萄酒酒場、イエルゲレ、ゲーテ酒場、ゴールドネ・ローゼあるいはオットーブルクで、彼はおよそ1リットルの葡萄酒を消費するのが常だった。たまには4分の10リットルにもおよぶことがあった・・・しかし酔ったトラークルを見た者は決していない。それというのも、彼は恐らくディオニゾス的能力を、単なる理論以上に示していたからである。反対に飲めば飲むほどいっそう醒めたと言われる。そして毒の麻痺作用が、彼を不意打ちしたというのは有り得ることだ。しかし予め外面的態度に明らかに見て取れる酩酊体験へ至ることはなかった。》トラークルが禁酒家、禁煙家そのほか健康の使徒たちの友ではなかったことは、とりわけ郵便葉書の文章から（ザルツブルク、1910年8月29日）明らかになるが、この文の穏やかな皮肉は、以前の学校仲間、アテルゼーの法律学生アントン・モーリッツに向けられた。〈私は最近5キロ痩せました。しかし私にとっては結構なことこの上ありません。世紀の一般的神経症質が減少したんですから、できましたらすぐにもヴィーンで、ミネラルウォーター、レモンスカッシュ、ミルクそれにニコチンを含めぬ煙草で再会を祝したいものです・・・〉

トラークルはヴィーンで頻繁に住所を変えた一一大都会に閉じ込められた田舎学生のあり触れた運命である。1911年5月には、しばらく国道のクリムシュガッセ10番地、戸口7号に住まった（一年志願兵として、個人の宿所を持ってもよかった）。トラークルが労働省に職を得ようとしていた1912年10月には、8区あるいは9区に住んでいたと言われる。そして1913年7月には一ー彼は当時一時的に陸軍省の決済官吏として働いていた一ーシュティフトガッセ27番地のシュヴァープのもとへ引っ越した。

トラークルが友人たちといつもよく訪れていた場所は、おもに住居に近い飲み屋だった。その情緒豊かな都会風地下レストラン（宮廷の傍ら）は、しばしば《銀の泉》亭とも呼ばれる。そしてプラターの酒場が、静かな酒宴の終点になることが多かったようだ。彼とグレートルをあらわす影絵も、このプラター公園で、影絵作者トラークルによって実物どおり描きあげられたのである。さらに近郊の葡萄村へ友人たちとハイキングしたことも知られている。例えば齒軌条鉄道でクラブフェンヴァルドゥルやカーレンベルクへ。トラークルがヘレンガッセの有名なカフェ・セントラル（ここには昼となく夜となく、名前を上げた、あるいはうだつの上がらぬ多くの文学者がたむろしていた）を、再三再四一ーひょっとすると内心では渋々だったにしろ一ーブッシュベックやヴィーンの知人フランツ・ツァイスと訪れ、ウルマン、ブレチュカその他と出会ったのは確かだし、かつての極めて戦闘的な前衛・建築家で生活改革者アドルフ・ロースとカフェ・

ムゼウムで、またクラウドとカフェ・インペリアルあるいはローリングー通り6番地のクラウドの家で会っていたのも間違いない。そしてあの頃、プラターに近い2区のアトリエに住んでいたオスカル・ココシュカが、トラークルはよく自分の所へやって来たと対談で語ったことがある。《私たちは〈突風〉〔現在バーゼル美術館所蔵〕と一緒に描いたことさえあります。一度は彼のポートレートを見たこともあります。しかし〈突風〉を描いていた当時、トラークルは毎日私の周りにいました。私のアトリエはとても原始的なものでした。彼は黙って私の背後のビール樽に腰掛けていたものです。それから時折、轟くばかりの声で語り続け、止むことがありませんでした。それから又、数時間沈黙していました。私たち二人は当時、市民生活の背反者でした。私は両親の家を出ていました。ウィーンでの私の展覧会と作品を巡って、嵐が吹き荒れていました。ところで彼は〈突風〉を、文字どおりその詩作品に引用したのです・・・》その通りだが、そもそもそういう関連があるとしても、ただ消息に通じていない者には、その関連は殆ど明らかにならないのである。後期詩『夜』の中でこう言われている。

金色に燃え上がる
民族らの兵火
黒ずむ断崖を超えて
死に酩酊して雪崩落ちる
灼熱の突風が
氷河の
青い大波が・・・

父の死後、トビアス・トラークル商会はマリア・トラークル・ハリック夫人と、その義理の息子ヴィルヘルムによって続けられたことは既に述べたが、管理者はヴィルヘルム・トラークルで、マリア夫人は形式上の（プロ・フォルマ）女社長にすぎなかった。今や定期的な金はヴィルヘルムから送られてきたが、ヴィルヘルムは見聞の広い経験豊かな商人として、商用旅行中に幾らか小規模になっていた家族の業務経営に責任を負っていた。家からの仕送りは全く《身分相応》だったようだが、それにもかかわらず、詩人は――軍隊時代とその後インスブルックで――ますます増大する経済的困窮にはまりこんだのである。今やおのれの情熱、アルコールと薬物の支払いに、友人たちからしばしば金を借りねばならぬ始末だった。義理の兄に、あるいはそれどころか母親に、いつも金の催促をするのは、トラークルにとって申し訳なかったことであろう。日付のない手紙（恐らくは1911年の晩秋）の文章も、多分それと関係あるだろう。〈私の状況は相変わらず晴れやかではありませんでした。そして私はこうして憂慮しつつ待っています。何とも反吐の出そうな状態！〉

心の状態に応じて、トラークルの全生活様式が変化した。根底で、彼は成熟期にはスパルタ的無欲の人間だった。そして又、満ち足りた市民の家の一員で特権階級に属するという意識が、時とすると良心の呵責を引き起こしたことも知ることができよう。秘かにそのことを悩んでいたかもしれぬ。この所属から生じていた物質的利点は、彼の状態では特別軽んじることができなかったものの。彼が素朴な人間たち――《民衆》――に示した気取りのない、しばしば自発的な親切心、いわゆる良い身分に属する人たちとの交際で、時折見せる拒否的態度、これらは危うい、無定型になった階級意識を推測させるのである。

償いと贖罪欲求が一目瞭然たる《修道士的》発作にもかかわらず、又しても、彼はおのれの収入状態を遥かに超える生活ぶりだった。そのため絶えず金の心配をしていた。アルコールを途方もなく必要としたことは、エディト・グレーベンシュッツがK. B. ハイน์リヒの精神で書いているように、トラークル《独自の過度の醒めた意識と心の傷つきやすさ》に帰せられるが、何と言ってもひどく金を食ったのである。だから彼は繰り返し、親友ブッシュベックに手紙を書く。そしてことに、インスブルックで軍薬剤師をする1913年春には、彼の状態は危なっかしくなる。〈たつてのお願いです。50クロネ借して下さい。このことをフォン・フィッカー氏に頼もうと思いました。しか

し実際のところ、とても難しく思われます。〉3日後には、又も抜き差しならなくなる。
〈私は既に絶対的窮地に落ち込んでいますから。〉

1912年6月17日、インスブルックで詩人と知り合ったレックも、間もなくその日記に《トラークルに10クロネ貸す》と書き留める。見受けるところ、これが何度となく頻繁に生じたため、レックはついに1913年10月26日の日記帳に不満をぶちまけている。《彼は一か月に200クロネ必要だ。葡萄酒の飲みしろと煙草代が一日2クロネ。大抵の人間はこの金でそれなりの生活をしているのに。》

慢性的に金に困り、父の家の状況が変化して、トラークルは兵役期間後、正規の仕事を探すことを余儀なくされた。そして感動的なまでに、そういう試みや準備を死の年に至るまで真剣に続けたのである。彼の心の気分、それに又アルコールと薬物による長期間の障害によって、定職に就くのはもはや無理であることが、やがては明確になったに違いないが。1911年10月15日から12月20日まで、彼は昔のザルツブルクの仕事場、ヒンターフーバーの天使・薬局で、薬剤処方士として働き定職を得ようと務めた。彼は失敗する――薬局勤務の神経を使う重荷に耐え得ない。そしてこれが明らかになればなるほど、彼はますます深く又も抑鬱的気分、既に思春期に見舞われ、今ではもはや逃れることのできぬあの気分の中へ沈み込む。

あの頃のトラークルにとって、唯一の気晴らしは《ザルツブルクの文芸と芸術の会パン》での交際だったが、ここへ彼を入会させたのは友人ブルネッティ・ピサノだった。知識人たちのこのサークルで（今は亡き芸術学者で教育家ルートヴィヒ・プラエハウザーがこのサークルを回想しており、情報を与えてくれる）、トラークルはボヘミアンのカール・ハウアー（1875―1919）とも知り合った。結核を思わす、痩せぎすの、病弱な、高い知的才能を持つ男だった。トラークルと同じく、善良なブルジョアの出だったハウアーは（父はザルツブルクで大きなパン屋を営んでいた）、全くブルジョアの恐怖の的であり、厳しく磨きをかけた知性を持つ懷疑家で、冷笑家だった。1906年のシュトライチャー・エピソードが繰り返された。即ち、トラークルがヒンターフーバーのもとで惨めにも失敗した後、軍薬剤師への復職を軌道に乗せたあの待ち時間は――かれは1911年12月1日、国境守備隊・薬剤士官補（ほぼ少尉の階級）に任命されていた――生涯最高の勝手気ままな時期に属していた。彼は妹への隷属関係を思い出させるやり方で、ハウアーに従った。《二人は二人以外の世界を拒絶しながら交際するこの数カ月の間、荒々しい放蕩に、抑制を知らぬアルコール享受に、そして察するところ性的放縦にもふけるのである》と、シュネーディツは書いている。又12歳年長のハウアーの、トラークルに対する関係には、ヴェルレーヌとランボーの関係のようなものが見えるという見方をする者もいる。

カール・ハウアーは、《炬火》がまだ協力者を許していた頃の常連寄稿家だった。国民学校の教職用の勉強をしたが、実際に教職に就くことは一度もなかった。俗物道德に対する攻撃の点では、激烈な知性と弁証法的光彩を放ったが、これら文化と社会批評的論争は（一部は、1911年出版のエッセー集《陽気で、陽気でない人々について》に採録された）、その政治的動機がとっくの昔に失われているものの、今日でもなお意義を持つであろう。見受けるところ、トラークルは社会的現実とおのれの滅びの哲学の関連を、決して明確には意識していなかった（少なくとも実践的結論をそこから引き出すことは決してなかった）。何れにしろ、ハウアーのように明確ではなかった。ハウアーは鋭い、客観的思想家だったし、形而上的煙幕化の影響を受けることはなかった。二人はその至福千年説的な、実際には少市民的《アナーキズム》を、何か利益社会の社会的構造を変換できるものだと見なしていた節がある。それはともかく、トラークルのクラウスやロースとの接触を取り計らったのはハウアーだった。詩人の最後の前の年の、そこから美しい友情が生まれることになった。

プラエハウザーは《パン》・サークルを回想しながら、両親の家に対するトラークルの立場に意味深長な光を投げかけている。この会の仲間たちの集合場所、ザルツブルク

の喫茶店に、《それからしばしば真夜中の時刻をすぎてもなお、40代終わりのハンス・ヴェーバー・ルトコフと青年トラークルと一緒に腰をかけ、両者の神経質が互いに競い合っていた。ヴェーバー・ルトコフは震える手で小さなモカコーヒーカップを口許へ運び、トラークルはマッチ箱の小さなマッチをつかみ、一本また一本と折りながら告白を続けていたが、例えばこういう具合だった――今日でもなお彼の疲れた声を聞く思いがする。〈私の一番好きな本はゲーテの〈親和力〉です。これはとても静かな、落ち着いた本です。〉しかしその時、一つ一つの言葉のどれもが、現実に対する侮蔑ないし軽蔑的拒絶のように響いた。呪わしい家の雰囲気窺わせるかなりの言葉が、それを語っていた。〈単純な生活〉の願いがしばしば口をついて出たのもそれと一致するし、彼にとっては〈一切れのパンと一杯のミルクが最も好ましい夕食〉だった。》そういう《修道士的》苦行の発作が、幾夜となく続く酒宴と矢継ぎ早に変わり得たということ、これは、市民生活に足を据えたいという真面目な狂気じみてさえいる試みと同じく、トラークルの両極性に染まった気質にとって独特なものである。そして絶えざる無への没落感、ないしは市民やあらゆる商売的事柄、物質的事柄一般に対する一切の拒絶。《無意味な権力や商売根性は、彼には縁遠いものだった。これが、スポーツ理想主義や西洋の幸福渴望ともどもドイツを破壊したのである。〈ドイツ人は誰もかれも斬首刑に処せられることを願います〉という彼の言葉も、この世界に向けられていた。トラークルは9柱劇場で9柱戯の球を手を持ち、活発に話を交わした後、そう語ったのである。》（マールホルト）

彼のこの両極性と曖昧さは、友人たち、あるいは偶然の知人が描く彼の種々の肖像にも映し出されている。例えばハインリヒは次のような像を伝えた。《生まれつき品がよく・・・品良く見せる礼儀作法は、彼には不必要だった。だから人々に対する外面的態度の面でも、すべての態度と同じく正直だった。言葉で言い現せぬほど、単純な流儀を歓迎していて、その光景はいつも私の胸を打った・・・働く民衆には、本当に気さくな振る舞いだった。いわゆる教養ある人々に対しては、時折厳しかったが、民衆には常に親切で思いやりがあった。だから外へ向かっては、例えば風変わりというのではなく、むしろ上等な社会で言われるように〈とても上品〉（トレ・コム・イル・フォ）だった・・・》スイスの作家ハンス・リンバッハは（トラークル、フィッカーそれにドラゴのインスブルックでの出会いに関する魅力ある記録は、彼のおかげである）、詩人についてほぼ丸反対の肖像を提出している。《この瞬間、トラークルが一人で部屋に入ってきた。彼は立っている方が、座ったときより背丈が小さく、ずんぐりして見えた。嬉しい様子も見せず、低い声でただ挨拶を述べ、私たちに手を差し出し腰をおろした。顔付きは無骨で、労働者の顔のようだった。その印象を短い首と投げやりな服装が――カラーを付けていなかったし、シャツはボタンが一つだけとめられていた――更に強めていた。それにもかかわらず、彼の外見には何か普通らしからぬ品位が刻印されていた。しかし暗い、殆ど悪意さえある顔立ちが、犯罪者の顔を思わせる何か人を魅了するものを彼に与えていた。というのも実際には、仮面のように彼の顔は硬直し、話すときも口は殆ど開かず、不気味にただ目だけが時々キラリときらめいたのである。》この報告が間違っただけのもの、あるいは先入見に捕らわれたものでなく、現実に応じていることは、トラークルと一緒にだった他の人物たちの情報からも明らかになる。ヘルダーリンの面倒を見たイザーク・ジンクレアのように、トラークルの面倒を見たルートヴィヒ・フォン・フィッカーでさえ、トラークルの本性に《キラリときらめく・悪》を認めたのである。詩人はしばしば、不当な思慮のない判断を見せた。そこで《重く押さえつけていた敵意が、私の中に目覚めた》と、フィッカーは述べ、トラークルにおいては、言葉の重さよりもはや彼のものではない深い所から出て来たのだという説明をしている。トラークルが新しい（形而上的）観相学の創始者、ルードルフ・カスナーに初めて――1913年ウィーンのプラター公園のアドルフ・ロースの会で――出会ったとき、《落ち窪んだ皮膚の色をし、十分眠っていない、例えば無邪気な悪徳に耽る子供のような》印象を与えた。これは、トラークル自身の言葉〈私はやっと半分しか生まれませんでした〉によって、確かめられようと、シュペリイは述べる（リンバッハによれば、トラークルは20歳になるまで、水を除けば周囲の世界の何物にも気付かなかったと、主張したことがあると言う）。チロルの詩人ヨゼフ・ゲオルク・オーバーコフラーの思い出によると、トラークルは大抵冷淡な、岩のような顔で座しており、その顔は特に朝方、凍てついた

ように見えた。別の報告によれば、彼は低い、単調な《地獄から聞こえてくるような》声で話した。そして長い独り言を述べたり、あるいは暗鬱に一人でぼんやり考え込んだりすることがしばしばで、それから突然高笑いするかと思うと、突拍子もなく話をしたりしたが、通常は話し相手を気にかけず、遠方を凝っと見つめていた。更にある観察者は、トラークルを見ていると、彼は意外と危険なものに思えないかと、何気なく質問されたことを語っている。トラークルの友人たちの中で、無比の友として、鋭い、他から煩わされることのない目を持っていたと思えるレックは、詩人との交際を二度中断したが、トラークルの辛辣な冷淡さと否定的判断が――《彼はいかなる種類の感情も知らなかった》――吐き気を催させたからである。しかしトラークルの外見にさえ、虎的なものとナイチンゲール的なものが同時に刻印されていたと書き留めるとき、レックは恐らく、トラークルの本当の（両極的）本性を最も適切に記述しているのである。

トラークルは1911年から12年の変わり目に金に困り、どうしても愛読書を買わねばならなくなったが、その中には、長期間伴侶同然だったドストイェフスキーの諸作品もあった。この事情は二つの理由から興味深い。第一に、心の糸の通うものよりも麻酔薬をこそ必要としていた詩人の状態が、どれほど既に悪いものだったかを語るし、第二に、そのために残りの所有書籍売却の目的で――ザルツブルクからインスブルックへ移るちょっと前――書かれたと思えるリストが、保存されていることである。このリストから明らかになるのは、トラークルがどの作家を評価し、作品を購入していたかということだ。トラークルがその成熟期、何を讀んだかという未解決の問題が、これによって部分的に答えられるのである。

作成されたリストには、ドストイェフスキーの偉大な、良く知られた小説と並んで、この作家の政治的著作も見える。ニーチェの主要な作品の他、ヴァイニングアの《性と性格》。メーテルリンクの主だった戯曲のすべてと詩も。カール・シュピッテラーの《オリンポスの春》並びに《プロメテウス》と《エピメテウス》。リルケの《新体詩》。ショーの二三の戯曲、その中には《カンディード》、《人間と超人》。ワイルドのとりわけ《獄中記》、《ドリアン・グレイの肖像》、《パドゥアの侯爵夫人》それに箴言集（《金言》）。シュニッツラーの《アナトル》、《孤独な道》、《操り人形》、《恋愛三昧》それに《輪舞》。ホフマンスタールの《エレクトラ》と《詩劇場》。これらを補う意味で、1913年7月29日のブッシュベックの手紙が得るところ多い。それによれば、トラークルはゴシック精神をテーマにした著作、この関連でドイツ絵画に関する著作を捜していた。ブッシュベックは友人に、ドイツ神秘家エックハルトやタウラー、それにゾイゼの著書にあたってみたという助言も与えた。そのほかダラゴがキルケゴールの作品に関心を向けさせたこと、ヘルダーリンとトルストイを情熱と畏敬の念で読み、クラウディウスを愛し、クラウドのエッセイも知っていた（クラウドの朗読会に、トラークルはヴィーンで――インスブルックでも一度――出席した）。これらのことがわかれば、彼の文学的素養について、おおよその像を思い描くことができよう。

3月の終わり、トラークルは知らせを受け取る。それによると、《帝室並びに王室薬剤士官》として現役採用され、4月1日付けで、インスブルックの帝室並びに王室第10衛戍病院薬剤部門で半年間の見習い勤務を果たすことになっていた。これで待ち期間は終わった。新しい一章、試練の新しい時が始まる――そしてこれにも耐えることができないのである。

ブッシュベックが回想しながら書いているように、トラークルはインスブルックでは駅の東、兵舎の近くに住んだが、《それは普通の新築の家で、防火壁の間にぽつんとあり、隣近所もなく、トウモロコシ畑を見渡して建っていた》。この生活と住居の酷いうら寂しさは、国立薬局の疲れる仕事によっていっそう強められた。4月の終わりには、わが身を嘆きブッシュベックにこう書く。《ここで気心の合うような人に出会えるだろうとは思えません。それにきっと、この街にしろ街の周辺にしろ、いつも私を突き離すことでしょう。恐らく私自身が望む以上に、ヴィーンの方がずっといいのではないかと思われるかもしれませんが、勿論私もそう思っています。ひょっとしたら、私はボルネ

オへさえ出かけるかもしれません。体内に蓄電されている雷が、何らかの方法できっと放電することでしょう。私のためにも、また病氣と憂鬱によって心の中から。)

だが忠実な男ブッシュベックはヴィーンで、遠方の友をせめて厳しい最初の時期から助けだそうと早くも計画を立て、それに取りかかっていた。ヴィーンの若き詩人ロベルト・ミュラー〔1887年生まれ。1924年自殺。革命的表現主義者。鋭い断面を見せる物語作家でエッセイスト。第一次大戦前は《ブレンナー》とヴィーンの《叫び》・小冊子の協力者。後には表現主義の指導的ドイツ雑誌《新評論》などの寄稿家。主要作品は《トローペン》《未開人》《権力》《未知のカメラ》《島の娘》《紳士とヴォルシェヴィキ》《精神の術策家》。ミュラーはカール・クラウスによって《文芸》《魔法のオペレッタ》(ヴェルフテルの《鏡人間》への返答)の中で、ハラルド・ブリュラーとして戯画化されている。〕に、トラークルの詩を渡し、読んでもらっていた。ミュラーは感激の言葉を付して、それをルートヴィヒ・フォン・フィッカーに宛てて、《ブレンナー》で印刷するよう転送していた。その中の一つ『南風の吹く場末』は、実際5月1日号に掲載された。

この詩や上に引用したトラークルの手紙と関係あるのが、5月13日のブッシュベックの次の返信である。《・・・<ブレンナー>はとても共感の持てる雑誌です・・・ヴィーンではかなり読まれているし、文化雑誌商フーゴー・ヘラーが最近私に説明したところでは、オーストリアの最良の雑誌だし、読むに耐える唯一のものだそうです・・・詩は、私の友人ロベルト・ミュラーが<ブレンナー>の発行者、ルートヴィヒ・フォン・フィッカーに送りました。フィッカーは大層喜んで、直ちに掲載させました。一度自分を訪ねるようにとともにフォン・フィッカー氏は書いていました。やはりそうしたまえ。しかしその時は、ロベルト・ミュラーを知っていると言いたまえ。ミュラーは君のことを友人だと書いたんだから・・・》しかしただ単に《ブレンナー》におけるこの初めての詩の印刷が、トラークルにとって重要だったばかりではない(それ以後は、彼の成熟詩はすべて成立順に従い、大胆な黄色の冊子に掲載されることになった)。間もなくそれに続く詩人のフィッカーとの出会いが、なおそれ以上に重要だった。トラークルが《ブレンナー》・サークルに初めて姿を見せたのを、カール・レックは5月22日の日記帳に書き留めている。それは恐らく、トラークルの生涯で最も意味のある出来事の一つだった。それというのも、エリーニュスに狩りたてられる安らぎを知らぬ彼が、実際に非難する所といえ、フィッカーのミュラーウの家、ラウフ・別荘か、あるいはフィッカーの兄弟ルードルフ所有のイーグルスのホーエンブルク城かだった。

《それは》とフィッカーは書いている。《カフェー・マクシミリアンの二階でのことだった。私はまたも昼食後すぐそこに来ていた。いわゆるブレンナー・テーブルで友人たちに会うためである。友人たちの所に腰を下ろすや、少し離れた所にいる一人の人間が目についた。マリア・テレジア通りに面する二つの窓の間で、一人フラシテンソファに座り、目を開けたまま物思いに耽っているようだった。髪は短く刈られ、銀色を帯び、顔つきは年齢がしかとわからぬ感じだった。この見知らぬ者は、人をひきつけずにはおかぬと同時に、超然たる所を見せる態度でそこに座していた。しかし私はすでに気付いていた。彼も一見すると、物思いに耽っているようではあるが、探るような目付きで何度となく私たちの方を見やっていた。そして私が現れるや間もなく、ボーイ長が彼の名刺を私に手渡した。ゲオルク・トラークルだった。喜んで私は立ち上がった――というのもちよっと前に(1912年5月)、私は彼の詩『南風の吹く場末』を掲載していた――挨拶をして、私たちのテーブルへ彼を招いた。》

絶え間なく再発する不安な状態と嘔吐感――《嘔吐と不安を克服できぬようになる》とブッシュベックは《鎮魂歌》に書いた――また肉体的心理的な疲労感、これらが軍病院薬局における仕事を辛いものにする。すでにザルツブルクのヒンターフーバーの所でも、報告されているように、客に対する不安から、午前中だけで6枚のシャツを汗びっしょりにしたことがあった――今やどこにいても、あらゆる人間に脅かされ迫害されているとを感じるのである。そしてこうした思いが日々強まっていく。多くの人間の存在が、恐怖の念を吹き込む。ブッシュベックは書いている(《ゲオルク・トラークル

一ある鎮魂歌》)。《彼はボーイに対する恐れからレストランを避け、同乗者たちから受ける圧迫感ゆえに、車に乗るのを避ける。窓から防火壁を見ることもできない。嘲り笑う無のように思われるのだ。彼にあからさまに語りかける昼を憎む・・・彼の心を支配しているのは、没落の感情なのだ・・・》

1912年10月1日、つまり半年の見習い勤務を終了した後、トラークルは上官二名の意見によって陸軍勤務に採用された。しかし4週間後には、早くも予備役への移動を申請する。いかなる理由でそうしたのか、推測することしかできない。未来を予感しつつ、自発的に諦めざるを得なかったのは、恐らく惨めな心の状態のためだったろう。だがレックの言うところに従うと、トラークルはその地位を強制的に奪われたのである。しかもその原因は、つまらない滑稽なものだったと言われる。トラークルはある将校と激しく口論したのである。床に唾を吐いたといって責める将校に対して、詩人は度を失うほど立腹したが、いつものことだった。請願は受理され、トラークルは11月30日予備役へ戻された。

活動的な友人たち、ヴィーンのブッシュベックやロベルト・ミュラー、それにインスブルックの《ブレンナー》の人々が、とにかくする内、再び詩集の予約を始めていた。トラークルは10月10日、インスブルックの予約者を追加したリストをブッシュベックに送った。〈予約名簿も返送したいと思います。成果は大したものではありません。〉そして数日後、〈予約者は100名です！〉それから多分11月だろう。〈同封のものは妹（ベルリンのグレーテ・ランゲンを指している）の数少ない予約名簿です。それは恐ろしい不幸の一記録みたいに見えます。なぜだかわかりませんが。〉トラークル・詩集予約の勧めは《炬火》と《ブレンナー》に掲載されていた。この二番目の詩集は『黄昏と滅び』の表題で、ブッシュベックから再びアルベルト・ランゲンに手渡されたが――最初同様――断られる。これによって、有名なミュンヘンの出版所には、大胆さも直観力もなかったことが立証されるのである。1913年3月19日のブッシュベック宛の手紙（コルフーツ・ホルムの連署がある）では、こう述べられている。《・・・トラークルの詩は、非常に才能溢れるものと見る点では一致しています。第一審査の審査員を除けば、全審査員が多くの特異性を唱えはしましたが。残念ながらこの判断によって、私どもの監査局では、作品を出版するに必要な意見の一致が得られませんでした・・・》

1912年10月1日号《ブレンナー》に、フィッカーは37長行の詩『賛美歌』（カール・クラウスに捧げる）を掲載したが、それには若干アンマーの翻訳によるランボーの《幼年時代》を思い出させる所がある。（ここではいわゆる賛美歌1を問題にしている。それというのも詩人の遺稿中に、それとは関係のない、同じく賛美歌と題された僅か16長行の詩が発見され、今では賛美歌2として通用しているからである。）次に挙げるのがその最終節である。

空っぽのボートがあって 夕暮れの黒い運河を流れてくる。
古ぼけて陰気な施設で生ける屍が腐ってゆき
公園の石垣のそばには死んだ孤児らが横たわっている。
灰色の部屋から天使らが現れ その翼は汚物のしみだらけで
黄色くなった頬から蛆虫がこぼれ落ちる。
教会の前の広場は暗く静まり返って まるで幼い頃のような。
昔の日々が銀の靴を履いてそっと通り過ぎ
地獄へ落とされた者らの影法師が 溜息をついている水の底へ沈んでしまう。
白い魔術師がその墓の中で蛇と遊んでいる。

髑髏が丘の上で 神が金の眸を静かに開きたもう。

この他にほぼ同様の美しさを持つ、トラークルに棄却された一節があり、そこには上の形象の幾つかが予示的に現れている（しかしひょっとすると、それらの形象は他の形象と平行して成立したものかもしれない）。この節は同じように、遺稿の中から初めて

発見された。

眠れる者らのもとに天使たちが現れる 広い翼を裂かれ。
櫛の木の下を額をほてらし孤独な者らが歩みゆく。
黒い沼地では弱々しい植物らが黙している。
囁くような風があり 神は悲しみの場所を去る。
教会は死に絶える。蛆虫が壁龕に巣くっている。
夏は穀物を燃やし尽くした。羊飼いらは去っていった。
何処を歩みゆこうとも 人は遥かな昔の生活に優しく触れあう。
水車と樹々が夕風に空しく動く。
荒寥とした街に夜が黒い天幕を張る。

いっさいの何と空しいことか。

クラウドとの関係はいっそう緊密になった。《ゲオルク・トラークル 賛美歌への感謝をこめて》という献辞で、《炬火》に次のような文章が載った。《7カ月児は、その眼差しが両親の責任である唯一の者だ。そこで両親は捕らえられた泥棒のように、盗まれた者の傍らに座っている。7カ月児は、自分から奪ったものを返してくれと要求する眼差しをしている。そして思考が途切れるときには、まるで残り物を捜しているように見える。そして欠けた所をじっと見つめ返す。考えながらそういう眼差しをする別の者がいる。だが余りにも多く手に入れすぎて、混沌に返したがつている眼差しを。それこそ生まれるのが遅すぎた完璧者だ。彼は羞恥の叫びを上げながらある世界へやってきたが、その世界にはただ一つの、最初で最後の感情、即ちおお母よ、素晴らしかりし汝が胎内よ、そこへ帰るがよい！という感情しか残されていないのだ。》この数行には、トラークルの特殊な精神的実存に対する深い理解ばかりでなく、《完璧者》には、母の胎内へ回帰する逃亡しか残されていないという、ある世界に対するクラウドの厭世的立場も表現されている。トラークルの反応は一通の電報だった。〈この上なく痛ましい明晰の瞬間を感謝いたします。深い尊敬をこめて、あなたの忠実なG・トラークル。〉

予備役へ移動の後、詩人は労働省に職を得ようとしていた――書記のポストだったが、少なくとも大勢の人間の目に触れず仕事ができるという見込みがあった。雇用が本決まりになると、彼は直ちにブッシュベックに知らせる。〈ところで私はやはり詩を携え、ヴィーンの君のところへ行くでしょう。12月1日付けで、労働省に任用されましたから。〉これに11月12日さらに次の伝言が続く。〈・・・この何日間かとても悪い毎日でした。ひょっとするとヴィーンではなお悪くなるかもしれません。ここに留まる方がずっと楽でしょうが、やはり出かけなければなりません。〉

ブッシュベックは友人を待ったが無駄だった。本人の代わりにザルツブルクから届いた知らせは、4週間の延期を労働省から得たので、12月1日までなお家に留まるということだった。この延期には歴史的な意味がある。あの12月には、トラークルの内容的にも偉大な詩、まだインスブルックに居るとき書き始められた『ヘーリアン』がかなりの所まで書き進められたのである。レックに宛てて、彼は聖セバスチャン墓地を表す絵葉書に書いている。〈・・・高貴なものがここでは（インスブルックでは）白いこめかみの回りに早くも月桂樹を戴いています。そうして感動した者は生きている者に従って行きます。というのも善と正義はそこにもあるからです。〉そして同じようにザルツブルクから、ブッシュベックに詩集『黄昏と滅び』の全タイプ原稿（アルベルト・ランゲンのための）を送る。〈私は二日間これに掛かり切りでした。そしてこれを特別な視点から整理せずに、君に送りました・・・詩の配列は別の方がよいと思われるなら、そうして下さい。ただ年代順にだけはしないように・・・〉それから多分、インスブルックにちょっと中途滞在した後、彼はヴィーンへやって来るのである。

12月も中旬になったが、仕事は捗らなかった。恐らく今回ロベルト・ミュラーとも知り合ったようだが、ブッシュベックが個人的面識の約束をしていた。（ミュラーには、

これ以外のトラークル・痕跡は見つかっていない。) だが12月末、ヴィーンで理解できないようなことが起きたらしい。トラークルは12月31日労働省で面接を受け、そこでたっぷり2時間過ごした。一日経た1913年1月1日には、もう辞職願いを書いたのである。カール・ボローメウス・ハインリヒはそれについてこう説明している。《・・・ヴィーンで『ヘーリアン』を完成させるのは不可能だという思いが、彼を再びインスブルックへ帰らせた。》ひょっとするとトラークル自身が、友人に対しそう述べたのかもしれない。だがさらに二度ほど、パンのための職業に腰を据えようと試みる――そして最終的にはそのことを断念するのである。折りに触れては思い浮かぶ移住計画は、恐らく環境や生活様式の急激な変化が心も回復させるのではないかという、むしろ本能に起因するものであろう。

彼はインスブルックへ引き返した。途中ザルツブルクでブッシュベックに頼み、先日の計画の失敗を、家族に、とりわけ義理の兄に納得してもらった。(ヴィルヘルムがその時、ブッシュベックが書いているように、この悪い知らせを《非常に冷静に》聞いたのは事実である。) ミューラウの避難所で、彼はすぐさま友人に告白する。〈私は死んだ人のようにハルを通り過ぎました。黒ずんだ街を。ハルの街は私の中を転げ落ちて行きました。呪われた者の中を、地獄が落ちて行くように。――わたしはミューラウの本当に美しい陽射しの中を歩いています。まだまだよろめく足で。ヴェロナールのおかげで、私はココシュカのフランチスカのもとで僅かばかり眠ることができました・・・〉

1913年1月――ラウフ・別荘のフィッカーの住まいで――『ヘーリアン』が完成された。ドイツ語詩の偉大な恒星時の中の一つの時が鳴っていたのである。1913年2月1日、その詩はブレンナーに掲載された。

胸には孤独の時が満ちて
美しい夏の陽射しに浸りながら
黄色い垣のほとりをさすろうてゆく。
草むらでかすかに足音がうたう。
けれど今日も 牧神の子が灰色の大理石に眠っている。

夕暮れ 私らはテラスで褐色の葡萄酒に酔った。
草むらで薄紅く桃の実が色づき
やさしいソナタの調べ 明るい笑い声が聞こえてくる。

美しい夜の静寂が降り
暗い野原で
私らは羊飼いと白い星たちに出会う。

こうして秋が来たとき
乾いた明るみが杜の中に満ちて
私らは和やかに赤い垣のほとりをさすらい
丸い瞳を開いて群れゆく鳥の後を慕う。
夕暮れの墓の中へ白い水が吸われてゆく。

そして結末。

黒い部屋に狂気の階がかかり
開いた戸の下に昔の者らの影が揺れる。
ヘーリアンの魂は薔薇の鏡にうつって
雪のしみと癩が彼の額から剥がれ落ちる。

壁にうつる星の影も
明かりに浮かぶ白い姿も消えた。

敷物の中から葬られた骸骨が迷い出てくる。
丘には朽ちた十字架がひそとたたずみ
紫の夜風に燻香の甘い匂いが漂う。

おお 両眼はつぶれて黒い奈落に落ちた。
裔なる者はいま優しい狂気に包まれ
孤独に閉ざされて暗い終末を思う。
彼の上に静かに神が青い臉を伏せ給う。

友人たちは事実、ヘルダーリンの形式とだけ比べられるこの詩を、熱狂的に歓迎した。《『ヘーリアン』の深さが明らかになればなるほど》と、ルートヴィヒ・フォン・フィッকারはトラークルに宛てて書いた（トラークルはちょうどザルツブルクに滞在していた）。《そしてその底にいつそ目を向ければ向けるほど、これはドイツ抒情詩が見せねばならぬ最も衝撃的啓示の一つだと、心の中でますます感じるのです。この詩の構造は、固定された永遠のように思われます・・・》そしてカール・ボローメウス・ハインリヒはこう大声を張り上げた。《きっと『ヘーリアン』を人々は読むだろう。その前に多くのものが滅び去らねばならぬ。同時代人が読むものだけでなく、同時代人が行ういろんなことの多くが・・・》

フィッকারはトラークルが内面的にも外面的にも動揺していたあの頃、望むなら《およそいつでも》ミュラーウの自分のもとへ、あるいはルードルフやパウラ・フォン・フィッকারの客としてホーエンブルク城へ来るようにと、絶えず招待していた。つまりマリア・トラークル夫人は閉店処理を余儀なくされていた。そしてゲオルクはこの苦境を傍観視できなかったのである。彼は直ちに家路を急いでいた。しかしフィッকারは深い正確な目で見ていた。《家でご覧になる状況の重荷は、あなたを圧迫することでしょうし・・・なおさら顔を出す必要のないことがきとおわりになるでしょう。》それに対して、トラークルはこう返答した。〈・・・《ブレンナー》が私にとって意味するものをますます深く感じます。つまり高貴な人間性に囲まれた故郷と避難所なのです。口に言い表せぬ精神的打撃に襲われています。それが私を駄目にするのか、あるいは完全にしようとするのかはわかりません。自分のあらゆる企てを疑い、滑稽なほど不確かな未来を前にして、あなたの寛大さと親切という幸福を、あなたの友情という寛恕的理解力を、口に出せる以上に深く感じています。——この頃では、私に対する不可解な憎しみが強まり、毎日の生活の些細な出来事に、嫌な形で現れることが甚だしくなって、私を驚かせます。ここの滞在は飽き飽きするぐらい嫌なものでした。私にはここから離れる決心を奮い起こす力もありません。〉

ザルツブルクでの薬局勤務中、一時的にまたそれを試みたようだ。〈なるほどヴィーンへ行くのは難しく思われます。薬局勤務で受け取った30クローネの内、5クローネを差し迫ったことに使ってしまったから〉という発言は、そのことを指している。4月1日トラークルはインスブルックへ行き、ブッシュベックにランゲン出版所から断られた詩集を、フィッকারの住所へ送ってくれるように頼む。インスブルックで〈もう一度徹底的に納得の行くまで目を通したい〉と言うのである。

すなわちフィッকারがその原稿をブレンナー・出版の本として出したい意向を述べていたが、さきに別の男が現れた。若いドイツの出版者クルト・ヴォルフが、4月1日の手紙で、一冊の詩集を自分に出版させる気はないかと、トラークルに問い合わせたのである。

手紙のやり取りは、ヴォルフ側からは最初、古い商会名エルンスト・ロヴォルト出版所、ライプチヒの名でなされたようだ。[クルト・ヴォルフは周知のごとくドイツ表現主義の有力な出版者の一人で、《ドイツ書店のための新刊案内誌》における広告によると、1913年2月18日から商会エルンスト・ロヴォルト出版所、ライプチヒを（1912年11月1日、エルンスト・ロヴォルトの引退後、ヴォルフがこの商会のただ一人の所有者になっていた）、クルト・ヴォルフ出版所という新しい名称でライプチヒ商

業登記簿に登録していた。] それというのもトラークルがその古い出版所――ブッシュベックはいつも《ローヴォルト》と書いている――について、インスブルックからの4月5日付けの手紙で言及しているからである。〈今日《ローヴォルト》出版所から、私の詩に関する大変好意的な申し出を受けました。喜んでそれを受諾するつもりです・・・〉

喜びがまもなく怒りに、いや腹立たしさに変わったのは、トラークルがこういうことを知ったときだった。ヴォルフは詩集を（その詩集には400クローネの一括謝礼が提供されていた）見取り図も十分には描かず、差し当たっては主な詩の中から極めて小規模な形で、出版所編集顧問フランツ・ヴェルフエルを目を通した選集として――謝礼150クローネ――出版することを考えていたのである。しかも《最後の審判の日》叢書の分冊としてだった。

ヴェルフエルはトラークルに伝えたように、それらの詩を感嘆の面もちで読んでいたし、《私があなたを通して受けた深い感動》についても書いた――しかしこれは、選集が期待外れの貧しいものであることを隠せはしなかった。トラークルは鋭く反応したが、この鋭さは出版者たちとの交際における詩人の未熟さという点から見ると、人を唾然とさせるに違いない。彼の電報はこう述べている。〈・・・あなたはその点では――しかも私の同意は副次的なものと仮定なさって居るみたいな無頓着さで――私にこうお伝えになります。まず私の詩の選集出版を最後の審判の日叢書で準備しており、この分冊は恐らく4週間以内に出版の運びになるだろうと。それには勿論のこと、私は決して同意いたしません。そして私の全詩集本を出版する（これだけが私たちの合意したことでした）前に、予め私が一度も目を通さぬ何らかの一部版を出すことはお断りいたします。〉

さらに手紙がやり取りされた後、妥協が成立した。簡単な『詩』と題され、いまや数を増やした選集が、上述のシリーズ《最後の審判の日》の仮綴じ複合本として出版されることになった。かかるものとして7・8号と付された、トラークルの抒情詩の初版が実際に出版されたのである。書店への引き渡しは、1913年7月・8月に行われた。複合本の定価は（72印刷ページに49の詩）、1マルク60プフェニヒだった。《この小さな出版に続いて、秋にはあなたの全詩集本を刊行します》と、出版所は期待を持たせたが、残念ながらかなり長い期間を要した。トラークルはこの最初の大きな詩集本（表題『夢の中のゼバスチャン』）を、もはや生きて目にすることはなかった。1914年春に、なるほど彼はゲラ刷りを読みそのかなりの所を変更したが、作品は死後ようやく1915年に、1914年の著作権・覚え書きによって出版された。しかし頭書の軋轢にもかかわらず、緑の小さな盾の付いた粹な黒い選集本も、詩人を喜ばせたことが知られている。

トラークルにとって今や、サイレント映画時代早期の、何かあの乱雑な低速度撮影場面を思わせる一時代が始まる。どこかに確かな地歩を占めようという試みは、不安定で性急になる。ウィーン公立病院で薬剤師の職に就くことはできぬだろうかと、1913年2月、ブッシュベックとシュヴァープに問い合わせる。その一年後には（1914年3月）、新成立のアルバニア国――ほぼ封建領土的特性を残すオペレッタ侯国――で、軍薬剤師として働く可能性について情報を集めてもらう。そして同じ年の6月8日には、オーストリア人薬剤師としてオランダ・インドに勤める見込みはないかを、王立・オランダ植民地行政機関に照会するのである。彼は休むことなくインスブルックとザルツブルクを往復する。父の店が閉じられる。

1913年6月半ばまで、トラークルはグレーテをザルツブルクで待ち受ける。妹については不幸な結婚生活を送っているのがわかっている――だが彼女は来ない。7月――ちょうどホーエンブルク城の客となっている――新たに妹のことを、それもザルツブルクで休暇を過ごしているブッシュベックに問い合わせる。〈惨めな気持ちで散歩していると、いろんなことがわかります〉と、すでに3月にはフィッカーに宛てて書いていた。そして〈多くのことが私には本当に難しく思われます。〉そして今や彼は意

気消沈している。それというのも何もかも失敗ばかりするからだ。そこで旅行中のアドルフ・ロース（トラークルは彼のことを素晴らしきロース・明けの明星と呼ぶことだろう）を、駅で捕まえ損なう。不運に不運が続く——それに加えて、家や友人たちへの恥ずべき依存！手紙には繰り返し、底しれぬ絶望の念が響き始める。そして自責の思いはとどまるところを知らない。〈余りにも僅かな愛、余りにも僅かな正義と憐憫、そして常に余りにも僅かな愛、余りにも多すぎる無慈悲、高慢、そしてあらゆる犯罪性——これが私です。私はただ弱さと臆病心から悪を思いとどまり、そのため私の悪意はさらに汚されていることを確信しています。魂が憂鬱に毒されたこの哀れな体内にもはや住もうとしない日、また住むことのできぬ日、魂が糞尿と腐敗物からできたこの嘲笑すべき姿かたち（それは神をなくした呪うべき世紀の余りにも忠実な鏡像にすぎません）から離れ去る日、その日が来ることを私は切に望んでいます。純粹の喜びという小さな花火にすぎぬ神を——そのとき人は救われるでしょう。愛を——そのとき人は救済されるでしょう・・・〉6月26日、このゆうにフィッカーに宛てて書いている。フィッカーはますますトラークルの魂が信頼を寄せる人に、聴罪司祭になる。フィッカーは注意深くしかも断固たる口調で、不幸な男に働きかけるのを試みる。《決して二度と嘆いてはいけません！いいですか！・・・しかし自分をより正しく判断するのに、どこか他の場所より、ここの方がずっと容易だと思われる場合には、いつでも望むときにおいでなさい》

トラークルには自分が再び軍隊に戻るべきか、戻らざるべきかがわからない。又しても、彼は生活状況の変化による救済を期待する——あるいはすでに救いが無いのなら、せめて慰安なりを。自分を《ブレンナー》・協力者の主要人物ロベルト・ミッヒエル（トラークルは彼とヴィーンで知り合っていた）のもとで使ってくれ、そうすればヴィーンあるいはインスブルックへ移れると、フィッカーに頼むのである。7月8日には、ザルツブルクからフィッカーに宛てて《『祈りの時の歌』の新しい草稿》を送付する。〈——すっかり暗闇と絶望感に沈み込んで。〉彼の生活そのままの暗闇と絶望感の中へ。〈ヴィーンへの出発は明日まで延期しました。この二日間激しい目眩の発作に苦しんでいるからです。〉そして4日後。〈大急ぎであなたにお知らせします。私は今週の末、ヴィーンへ行かねばなりません。これが暗闇への歩みになろうとも、すでに一步は踏み出されたのですから・・・〉

ヴィーンでは1913年7月15日から月12日まで、陸軍省の役人として働く（《彼は役人になるのを決して望まなかった》と、フリッツ・トラークルは言ったことがある）。〈私はヴィーンで無給職についています〉と、彼は不機嫌にフィッカーに書いている。〈この仕事は全く吐き気を催すもので、鈍すぎる頭でまたも勉強する羽目になった私の計算に対して、いかなる保証金も請求されないのに毎日不思議さが募るばかりです。〉トラークルは精神的妥協を許さぬ生活態度の極星として念頭に浮かぶ、クラウドやロースとの出会いを求めた。フィッカーは6月15日の《ブレンナー》に——カール・クラウドに関する雑誌のアンケートの枠内で——トラークルの呼びかけ『カール・クラウド』を掲載していた。

真理の白い大司祭
水晶の声に神の氷の息が宿る。
怒る魔術師
火のマントの下で戦士の青い胸甲が鳴る。

そして10月には、アドルフ・ロースに捧げられた詩『夢の中のゼバスチアン』が発表される。トラークルの魂の最も美しい啓示の一つで、父の家と幼時を思い出させるものである。

・・・

魂は平安に浸って孤独な冬の黄昏が来た。
古錆びた池のそばに羊飼いらの暗い影がたゆたい

藁小屋の中で幼児が眠って居る――
おお 黒い熱に震えて少年の顔は静かに崩れ伏した。
聖夜だった。

・ ・ ・
喜びの時もあった。涼しい黄昏の部屋にはソナタの調べがわき
褐色の木づくりのなげしで
銀色の蛹の中から青い蝶が誕生した。

・ ・ ・
復活祭の鐘が夜の納骨堂で薔薇色の響きをあげ
星たちは銀の声でうたう。
眠っている彼の額から暗い狂気のしこりが剥がれ落ちた。

・ ・ ・

ロースは数週間前から骨を折っていた――恐らく慌ただしく取り決められたザルツブルク駅でのランデブーはそのためだろう――ヴィーンの商業美術館にトラークルの職を見つけてやるのを（《6時間の労働時間で月額わずか80クローネ》）。神経細やかな文化人の本能で、ロースはトラークルの実存に潜む無定形さを嗅ぎつけていた。一年後の1914年6月27日（トラークルはロースにちょうど詩集『夢の中のゼバスチアン』のゲラ刷りを送っていたが、それに対しロースは驚きの声を上げた。《これはまた何と素晴らしい詩集ができることでしょう！》）、ロースは詩人にこう書くことになったのである。《お達者で、愛するトラークル！この世界に元気でいて下さい。みずからを聖なる精神の器と見なして下さい。何者たりとも、ゲオルク・トラークルといえどもこの器を壊すことは許されないのです。》これは――サラエボ暗殺計画の前夜、そしてトラークルの死の4カ月前――記憶に値する言葉である。

ロースとそのイギリス人の妻（ペーター・アルテンベルクによって賛美され、敬い慕われた以前の踊り子ベッシー・B）は、夏の間中ベニスに滞在していたが、大抵アルテンベルクと一緒にだった。ロースは今度も、それもすでに5月には、そう書いているようにアルテンベルクをこの水の都へ《運び込んで》いた。クラウドは自家用車で後から行くとしていたし、フィッカー夫妻も同じ頃ベニスに滞在することを約束していた。トラークルも是非出かけるよう招待されていた。

8月中旬、ブッシュベックは明るい空から舞い込んだような、垢抜けた地階レストラン風景を受け取る。それにはこう書かれている。〈君！世界は円やかです。私は土曜日にベニスへ落ちて行きます。ますます遠くヘー――星々のもとへ。〉（またもこの宿命的な没落感情！）これが忠実な男に宛てた最後の知らせなのである。

トラークルの生涯における唯一の観光旅行――ガルダ湖へのフィッカーとのハイキングを除けば。ベニスではバラバラに、一方は市内に、他方は（アルテンベルク、クラウド、ロース夫妻）郊外のリドに滞在した。フィッカーは朗らかで気楽だった日々を回想している。異質極まりない《ファッケル》・《ブレンナー》一行の雰囲気は――トラークルとアルテンベルク間の対比以上に大きな対比は考えられなかった――素晴らしかったらしい。皆が海や太陽を楽しみ、マルクス広場のカフェ・フローリアンあるいはダニエリホテルのアメリカン・バーで気兼ねなく付き合ったのである――それが最後の平和な夏になろうとは誰も想像しなかった。フィッカーはクラウドと――ウディーネとロンガローネ谷を超えて――車で帰った。夫人チッシィ・フォン・フィッカーはその前に帰っていた。トラークルが帰路どの道を辿ったかは知られていない。他の者は留まった。

休暇はまるまる12日間続いた。その成果は、滅びの音色が響きわたるただ一つの詩だった。〈・ ・ ・うす黒い蠅の群れが／石の部屋をかげらせている／そうして金色の昼の／苦悩が張り付いている／故里のない人の顔に・ ・ ・〉

それからヴィーンで恐ろしい挫折感に襲われたようだ。夏の日々の楽しさに――上の

例が示すように、トラークルはもはやそれを詩にすることはできなかった――今に至るまで不可解な地獄が続いた。11月11日、詩人はフィッカー宛に書く。〈私のいろんな問題は少しもはっきりしません。二日二晩眠りこけたところです。そして今日も、まだヴェロナールの毒が少しばかり残っています。最近の私の混乱ぶりと絶望ばかりの中では、どうやって生き延びるべきなのか、もうさっぱりわかりません。ここでは恐らく、援助を差し伸べてくれる人間に出会うでしょう。しかし私を助けることはできないように思われます。そして一切は暗闇の中に果てることでしょう・・・クラウスが呉々も宜しくとっています。ロースも同様です。〉次の日、友人に〈ベッシー・ロースのために〉という献辞のある『カスパール・ハウザーの歌』に目を通してくれと頼み、こう付け加える。〈最近私は大量の葡萄酒を飲みました。火酒とビールも。酔いませんでした。〉

あの危機的時代の心の痛みという身の毛のよだつ記録、同時にはっきりしてくる狂気に対する不安の記録は、フィッカーが《1913年11月》と書き留めている次の手紙である。〈・・・そして最近、他にも私にとりとても恐ろしいことが生じました。生涯その影を振り切ることはできないでしょう。そうなのです、尊敬する友、私の生活はこの何日かで、言うに言えないほど粉々に砕かれてしまいました。そしてただただ、口も聞けない痛みだけが残っています。苦ささえ拒まれた痛みが・・・私に二つの言葉を書いて下さるでしょうか。どうすべきなのかもわからないのです。世界がまっぴらつに裂けるのは、とても名づけようのない不幸です。おお私の神よ、いかなる裁きがわが身になされたのでしょうか。私は生き続けて真実を成す力を持たねばならぬと、私に言って下さい。石のような暗闇が訪れました。おお私の友、何とちっぽけに、何と不幸に私はなったのでしょうか・・・〉心電図のちらちらする線を思い出させる、落ち着きのない筆跡が衝撃的である。

この絶望突発の誘因を、トラークルは決して漏らさなかった。それはひょっとすると、グレーテの失敗に帰した結婚や、その妊娠とつながりがあるかもしれないと、フィッカーはかつて示唆したことがある。事実妹はその次の3月に流産し、悲劇的結末を迎える。そしてゲオルクは大急ぎでベルリンへ旅立つのである。

全力を傾け、彼は軍職（ハウプトマン・ミッヒエルによって陸軍省の）への復帰をはかる。〈私は無条件に、再び軍隊へ戻ります。つまりまだ採用してもらえればの話ですが・・・土曜日あるいは日曜日には、インスブルックへ行きます。そこで軍務に就く準備のためです・・・〉そして12月初めには、事実インスブルックに滞在し、フィッカーやレックと自分自身の作品の朗読プログラム――それは彼の生涯で唯一の公的な朗読なのである――を用意する。《ブレンナー》の第4回文芸の夕べとして、1913年12月10日、インスブルックの音楽会堂で行われた朗読会プログラムには、トラークルの他に（ハウプトマン）ロベルト・ミッヒエルが出ていた。[過去3回の文芸の夕べは、カール・クラウスによって（1912年1月4日）、テオドール・ドイブラーによって（1912年11月22日）、そして再びクラウスによって（1913年1月1日）引き受けられていた。クラウスはその後3回目の朗読を、1914年1月にインスブルックで行った。トラークルはクラウスに、ミュラーの《ブレンナー》・サークルでも会ったことがあるし、同様にテオドール・ドイブラーにも会っていた。ドイブラーとブッシュベックの間には親密な友情があり、そのためトラークルは既に《北極光》・叙事詩の創作者に親しかった。] ミッヒエルは長編小説や、ボヘミア、ボスニアの国境体験それにヘルツェゴヴィーナから得た写実的物語によって、既によく知られていた。聴衆も新聞も関心を示した。トラークルの飾り気のない、内面化された、祈りにも似た詩の語り掛けは、ここかしこで称揚された。『ヘーリアン』はそれ相応に評価され、謎解きが試みられた。

だが朗読の夕べの強い刺激、そしてその後かなりの期間に及ぶ詩作品の最終印刷用の篩い分けの仕事は――喫茶店でトラークルに年代順を決めるように頼み、詩人は《思い出しながら》それを行なったと、レックが書き留めているのは12月10日である――痛み螺旋の見せかけの中断にすぎなかった。友人たちを退けての飲酒耽溺と麻薬で悩

みを紛らす行為は、やはり止めどなく多くなるのである。〈荒れ狂うような飲酒と犯罪者の憂鬱のこの頃・・・〉と、クラウドに宛てた12月13日の手紙は始まっている。要するに、奇怪な徴候が告げられる冬のことだった。

ダラゴやフィッカー、それにハインリヒによって醸されていた《ブレンナー》・サークルの宗教的雰囲気は、トラークルが何度となく失い、あるいは押し退けていたものの、決して否認してはいなかった彼のキリスト教精神を再び思い出させた。〈おお暗い魂の中になんと密やかに十字架がそそり立ったこと〉と、『夢の中のゼバスチアン』で言われている。トラークルの少なからぬ言葉から見て取れるのは、キリスト教を精神的反乱として、極端な顕示性（アウスゲゼッツトザイン）として、いな聖なる癪病として、烙印として、西洋の人間にまだ存続する最後の真実の証しとして見ていたことである。トラークルのキリスト教は、神の恩寵とあらゆる聖寵手段の占有を妄想する、あの信仰確信と決して混同されてはならない。《彼の求める神は身を隠した。そして救いを求める彼の声に、空虚な天国の沈黙を相対させる》と、ヴィルヘルム・グラスホフは述べている。カフカの不合理な神学におけると同様、トラークルもその生存を地上を去った神へ秩序づける。〈誰かがこの黒い空を見捨てていった〉（『途上』）。トラークルの世界にはだから恩寵はない。（なるほど恩寵はあるかもしれぬが、しかし私たちのためのものではないと、カフカが似通ったことを書き付けたことがある。）神はトラークル・世界では黙している。そして彼の使徒、天使たちも黙している。《トラークル詩の天使はキリスト教の天使ではない》と、フリードリヒ・ゲオルク・ユンガーは書いている。そしてそのトラークル・エッセイの別の所で、ユンガーは言う。《しかしもし神が黙しているとすれば、すべてキリスト教的なものは過ぎ去ったものである。それは共に消滅に見舞われているし、現れ出るものはこの消滅の支配下にあるのだ。》

神が遠ざかった世界は――神学的見方では――人間を一人にさせる。それは氷のような凍結した思考世界であり、トラークルはその光景が、チロル高山地方のゴシック的冰塔に映し出されているのを見た。静かなエクスタシス、恍惚とした語り口、アルプスの氷の巨人世界と境を接する、晩年とその前の年の創造的言語の高み（そこでは抒情詩、散文それに戯曲が、太古の時代さながら混在している）、これらは、おのれが完全に一人にさせられたことを知り、そうであるが故に、地上の実存の重荷を一人で耐えねばならぬ人間の表現である。（どんな慰めも救いとはならなかった。）日々確かなものとして経験される、完全な恩寵喪失という、無をうがつ気持ちの中で――カルロス王子のヴァリエーションを考えてよかろう――神経が引き裂かれると、彼は繰り返し怒りと絶望の発作を起こす。そしてこの状態像に似つかわしいのが、不気味な攻撃行動と自己攻撃行動であり、彼の腐敗憑依はこれに属する。グラスホフは腐敗憑依の中に、《古代キリスト教的罪意識と罪障意識の暗号》を見つけようとしている。

ほんの僅かの――ますます少なくなる――人々には、あの晩年の最も苦しいとき、詩人はおのれの心を開く。だが動物には親しい。〈動かないものの息吹。動物の顔が／青とその聖性の前でこわばっている。〉特別に鋭敏化され毛羽だった感覚で、彼は人間に委ねられた生き物の被虐待性を、ほとんど肉体的に耐え忍ぶ。マールホルトは語っている。《音楽やダンスで大騒ぎしていた、ある農民風の教会寄進記念祭でのことだが、賞として出されていた子牛の頭の前で、彼は全身を震わせながらこう言った。〈これは、私たちの主キリストだ。〉》ここではフランチェスコ的、いな原始的深淵と地下墓所から出現したキリスト教が語られている。奇妙で、前論理的で、逆説的に。

トラークルの筆跡さえ、この悲痛な・厳しい思考世界に従属しているのを認めることができる。筆跡はますます鋸歯状に、ますますゴシック的になる。以前の（例えば1912年春に至るまで）軽快で弓形をしたラテン字体の署名《T》は、突如急傾斜の走り文字になり、鞭あるいは絞首台のごとくそそり立つ。つまり懲罰と判決の文字象徴なのである。

トラークルとダラゴ、それにフィッカーの間の会話（1914年1月に行われ、既述したスイスの作家ハンス・リンバッハによってメモされた）が、トラークルの当時の思

考世界への眺望と入り口を提供する。トラークル側から積極的に行われたこの会話で、詩人は〈私には地獄を免れる権利はありません〉と告白した――癒し難い自己処罰幻想の最も簡潔な表現である。ダラゴの問い、《それではあらゆる恩寵は彼（キリスト）から来るとあなたも信じているのですか？あなたは〈神の子〉という言葉で本来の意味で理解しているのですか？》に対して、〈私はキリストです〉と、彼は答えた。そしてダラゴが更に、《あなたはいったい仏陀あるいは中国の賢者たちのような非キリスト的顕現を、どう説明するのですか？》と挑戦したとき、トラークルは〈彼らもその光をキリストから受け取ったのです〉と述べた。聞き手はこの（それにしてもシャートフにふさわしい）返答の後、その逆説の深さをじっくり考えるため黙り込んだと、リンバッハは述べている。しかしダラゴはまだ満足できなかった。《ではギリシャ人は？あなたはいったい人類がその時以来、一層の深みへ沈み込んだとも思わないのですか？》トラークル、〈人類は決して現在のキリスト出現後ほど、深く沈み込んだことはありませんでした――これほど深く沈み込むことは、全くできませんでした！〉その後、議論はドストエフスキーとその人物たちに向かった。リンバッハは続けている。《私が思い出す限り、ソーニャをきっかけとして、彼は美しい言葉を述べた――再び荒々しく輝く目付きで――〈女性は官能の悦楽だけを求めると主張する犬どもは、打ち殺されてしかるべきでしょう！女性はその正義を、私たちそれぞれと同様、上手く求めるものです！〉トルストイについても高い畏敬の念で語った。〈十字架の下で挫折した牧羊神〉と、トラークルは彼を呼んだ。》

トラークルがここでトルストイについて述べたこと――これは彼にも通用しないだろうか？